

- ソ連は昭和20年8月8日、日ソ中立条約を一方的に破って満州に侵攻してきた
- ▽ソ連は4月に「中立条約延長せず」と通告
- 日本は 条約期限があと1年
- 残っていることに 一縷の望みをかけ
- ソ連を仲介にした和平工作に懸命に
- ▽しかしソ連は ヤルタ会談で
- ドイツ降伏後対日参戦の秘密協定を結んでいた

ヤルタ会談 昭和20年2月4日からクリミア半島ヤルタに、ルーズベルト、チャーチル、スターリンの米英ソ三首脳が集まり、第二次大戦後の戦後処理について話し合った。

ルーズベルトは対日戦の連合軍の損害を少なくするため、ソ連に参戦を要請、最終日の11日に秘密協定書が調印されたが、戦後日本の運命を決めた日であった。

それは、ソ連は樺太南部、千島列島の領有などを条件に、ドイツ降伏後、三か月後に日本との戦争に参加するとの協定だった。

- 日ソ中立条約の立役者は、第二次近衛文麿内閣の外相の松岡洋右
- ▽近衛内閣の外交は 日独伊三国同盟をはじめ
- 終始 強気で自信家の松岡に引きずられた
- ▽それがもたらした結果は
- 日本の運命を左右するほど重大なものだった
- ▽松岡は16年3月12日
- リッベントロフ独外相の招きで訪欧の旅へ
- ▽独伊訪問は看板
- ソ連との政治協定が 隠された目的だった
- ▽松岡構想は 三国同盟にソ連を加え
- 四国の力で米英に対抗 対米和平へ持っていく
- 出発の時点で、松岡構想は根幹から崩れていた
- ▽ドイツは三国同盟の際 日ソ国交調整を約束
- 松岡も大いに当てにしていた

ルーズベルト (Franklin D. Roosevelt)
1882～1945 昭和8年第32代米国大統領に就任。第二次大戦で連合国を主導し、異例の四選を遂げたが任期中に急死

チャーチル (Winston Churchill)
1874～1965 英国首相。第二次大戦に強力な指導力を発揮。戦後の昭和26年、再度首相。著に「第二次大戦回顧録」

スターリン (I. V. Stalin)
1879～1953 ソ連共産党書記長。昭和16年首相となり、祖国防衛戦争を指導。死後、その独裁的政治を批判される

近衛 文麿 (このゑ・ふみまろ)
明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。昭和12年6月首相となり、支那事変の早期和平に失敗。15年7月第二次内閣を組織、日独伊三国同盟締結、北部仏印進駐で対米関係悪化。日米交渉のため松岡洋右外相を更迭し第三次内閣を組織するが、妥結の展望を失い、10月総辞職。戦後戦犯に指名され服毒自殺

松岡 洋右 (まつおか・ようすけ)
明治13(1880)～昭和21(1946)山口県生まれ。13歳で渡米、苦学してオレゴン大学を卒業し外交官試験に合格。総領事で退官し、満鉄理事、副総裁を経て昭和5年政友会代議士。8年の国際連盟総会で日本代表として満州国否認に抗議して退場。満鉄総裁、内閣参議を経て15年近衛内閣外相。日独伊三国同盟を締結、16年に日ソ中立条約を調印。独ソ開戦後は対ソ開戦を唱え、対米強硬姿勢を主張して外相を更迭される。戦後、A級戦犯として起訴されたが入院中に病死

▽しかし独ソ関係は急速に悪化

ルーマニアの石油や北欧をめぐる対立

▽ソ連モロトフ首相との話し合いも決着せず

▽ヒトラーは15年12月18日

「16年5月15日までに作戦準備を完了するよう」ソ連攻撃命令（バルバロッサ作戦）

●ソ連の盗聴器を計算に入れ、随員相手に談論風発

グルー・アメリカ大使の言葉

「松岡と話すと、その九五%を彼が喋る」

▽「一万言就寝居士」があだ名

▽同盟通信編集局次長岡村二一さん（戦時中）に

「ヒトラーとムッソリーニは付けたらだ。三国同盟はもう出来ちゃったんだから、何も俺が行くことはない。ただモスクワへ行くのに寄らんわけにもいかんから、モスクワの方は帰りに寄った格好にする。目的は君、ソ連との政治協定だよ」

●まずスターリンと会って、訪独後の交渉の伏線

▽秘書官の加瀬俊一さんが「会見希望」の電報

建川美次駐ソ大使からは「会うはずがない。断られて恥をかくだけだから、止めた方がよい」

▽「本大臣の訓令を即刻執行相成りたし」と命令

▽モロトフと会談中 「どうです、

スターリン書記長と会いませんか」

▽「松岡、スターリンに会う」は電波に乗って世界に

●ドイツ側の要求は常に「シンガポール攻撃」

▽松岡は3月26日ベルリン入り 熱狂的な歓迎

▽ヒトラーの作戦命令には

「急速にイギリスを屈伏させ、アメリカ参戦の機会を失わせるため、バルバロッサ作戦と呼応して、日本にシンガポールを攻略させる」

▽日本側も うっかり約束しようものなら

対米戦に巻き込まれる危険性

▽政府訓令で松岡にクギを刺した

「武力行使について、日本の自主性を拘束するような約束はするな」

リッベントロフ(J. Ribbentrop)

1893~1946 昭和13年独外相。独ソ不可侵条約、日独伊三国同盟を締結。戦後ニュルンベルク裁判で死刑

モロトフ(V. M. Molotov)

1890~1986 ソ連首相兼外相。独ソ不可侵条約を締結。スターリン死後、フルシチョフと対立し昭和32年要職から追放

ヒトラー(Adolf Hitler)

1889~1945 ナチス党首。ベルサイユ条約打破、反ユダヤ主義を掲げ昭和8年首相。一党独裁制を確立し、翌年大統領を兼ねて総統。14年9月第二次大戦を起こすが、ベルリン陥落直前に自殺した

グルー(Joseph C. Grew)

1880~1965 米国務次官を経て昭和7年駐日大使。戦争で17年に帰国するまで、日米関係改善に努力。帰国後、国務次官や国務長官代理。著に「滞日十年」

ムッソリーニ(Benito Mussolini)

1883~1945 ファシスト党を結成し、イタリア首相。第二次大戦に参戦し、一時失脚。パルチザンに処刑される

建川 美次(たけがわ・よしつぐ)

明治13(1880)~昭和20(1945)新潟県生まれ。陸軍中将。日露戦争で騎兵の建川挺身隊を率いて活躍、山中峯太郎の「敵中横断三百里」のモデルに。参謀本部作戦部長として満州事変を指導。師団長歴任後、昭和15年に駐ソ大使

リッベントロフの証言

「ドイツはソ連と開戦する前に、何とかして日本にシンガポールを攻略させ、それを機会にイギリスと講和したかったのだ」(ニュルンベルク裁判で)

▽杉山元参謀総長は 東京駅で松岡見送りの際
「シンガポールはダメだよ。いいね、ロシアを
頼んだぞ」と念を押した

▽この一言に 松岡訪欧の使命と軍部の期待

▽ヒットラーは「イギリスが無力で、アメリカの戦
備が整っていない今こそ、神が日本に恵んだ好
機ではないか。シンガポールを攻撃すれば、イ
ギリスの崩壊は確実だ」

▽松岡は はっきりした回答を避けた

●松岡の関心は、ドイツが約束通り

日ソ国交調整にどう動いてくれるか

▽リップントロープの答えは冷淡なもの

「モスクワに長居は無用だ」「ソ連とは余り立
ち合った話し合いはしない方がよいだろう」

▽決定ずみのソ連攻撃計画には一言も触れなかった

▽海軍総司令官レーダー提督は「いっそ松岡にソ連
攻撃計画を知らせたら、日本は北方の脅威を感ぜ
ずに安心して南進するのではないか」と進言

▽ヒットラーの鶴の一声で「絶対極秘」の命令

▽ムツソリーニにも一切内緒だった

●松岡外交の限界

▽大島浩駐独大使は「あるいは独ソ戦があるかも知
れない」と報告 松岡がベルリンに招集した在欧
大使・公使会議でも、緊迫した情勢が指摘された

▽松岡は一人で喋って 情報に耳を傾けなかった

▽ヒットラーは明言こそしなかったものの

それなりのサインは出していた

「万一の際は二、三か月でソ連を抹殺する自信
がある」「天皇に報告される際は、独ソ衝突の
可能性が絶無でないことに留意して頂きたい」

▽随員が独ソ戦の可能性に触れると

松岡は一言のもとに 「ノー」と否定

▽ヒットラーの言葉は シンガポール攻撃を

促すためのブラフ 東京にも報告しなかった

●ユーゴで反独クーデター勃発

▽3月27日 松岡がヒットラーと初会談の最中に
第一報 会談は再三中断され3時間に

杉山 元(すぎやま・はじめ)

明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生
まれ。陸軍大将、元帥。昭和12年陸相、15
年参謀総長、19年陸相再任。第一総軍司
令官となり、敗戦の翌日ピストル自決。
重要会議を記録した「杉山メモ」を残す

軍部に強まった対ソ国交調整

日露戦争以来、ソ連は常に日本の
仮想敵国であり、満州に膨大な関東
軍を展開させたのも、その脅威に備
えるためだった。しかも昭和14年に
ノモンハンで死闘を繰り広げたばかりの陸軍が、日ソ国交調整に熱心になっ
たのは南進論との兼ね合いから
だった。

日米通商条約は15年に廃棄され、
アメリカが石油、屑鉄の輸出許可制
に踏み切ったため、日本はこれを蘭
印など南方に求めようとした。しか
し南進政策を進めるには、英米との
衝突も覚悟しなければならず、それ
には日本の背後、ソ連との関係改善
を望む声が軍部を中心に強まった。

大島 浩(おしま・ひろし)

明治19(1886)～昭和50(1975)東京生まれ。陸軍中将。駐独武官を経て昭和13年
駐独大使。日独伊三国同盟を推進したが、独ソ不可侵条約で辞任。15年再任され敗戦まで在職。戦後、A級戦犯で無期
禁固。30年釈放

ドイツ軍のユーゴ進撃

昭和16年3月27日、二日前にドイツ
の圧力で三国同盟に加盟したばかり
のユーゴスラビアで軍部の反独クー
デターが勃発した。後ろで糸をひい
ていたのはソ連で、新政府は同盟を
脱退、中立政策を宣言した。

怒ったヒットラーは4月6日、「刑

▽モスクワへ向かう車中 特別放送で
ドイツ軍のユーゴ進撃を知り 加瀬さんに
「おい、これでモスクワとの交渉は出来たよ」
▽独ソ友好が独ソ反目へと 舞台は変わったが
松岡は「ソ連はドイツを警戒して、日本に対し
ては下手に出るに違いない」と読んだ

●モロトフ会談は4月7日から始まったが、モロトフ
は代償を要求した

▽中立条約提案に「日本が北樺太に持っている
石油や石炭の利権を放棄すべきだ」

▽モロトフは「ロシアという国は
領土は渡さん、利権は離さん」

●松岡は帰国列車を延ばし、時間を稼ぐ必要があった

▽モロトフと話していても 意識は常にアメリカに
日独伊にソ連を加え その力をバックに
アメリカとのテーブルにつきたい

▽松岡は新婚生活を送ったレニングラードへ
バレーをゆっくり楽しみ その間に
スターリンの気持ちが動くのを期待した

▽11日の交渉でも平行線

松岡は交渉をサッサと打ち切りキャバレーへ

▽日本大使館から「スターリンが会いたい」と電話

●スターリンは、松岡の真意を測っていた

▽日本は本当にソ連と事を構えたくないのか

松岡はソ連攻撃の密約をしてきたのではないかと

▽ドイツ軍は独ソ国境に続々と集結しつつあり
ルーズベルト、チャーチルからも

「ドイツはソ連攻撃を計画している」との警告

▽スターリンは半信半疑だった

米英は絶えず 独ソ離間を試みている

うっかり乗っては危険と とりあえずは

下手に出て ヒットラーのご機嫌とり

▽そこへ松岡来訪

ヒットラーがソ連攻撃を計画しているなら

松岡に圧力をかけ 日ソ交渉をやめさせるはず

▽松岡の中立条約提案は ヒットラーと打ち合わせ
ずみと考え 独ソ戦はしばらくないと結論

罰作戦」と名付けたユーゴ進撃を命
じ、三日間の猛爆で首都ベオグラ
ードは廃墟に。市民の犠牲も1万7千
を数え、ユーゴは17日降伏した。

しかし結果的には、この軍事行動
で貴重な二週間を空費したことが、
ドイツ敗戦の大きな一因になる。

5月25日の対ソ開戦日が6月22日に
ずれ込んだ上、雨季が例年より早く
やってきた。悪天候で機械化部隊が
動けなくなったところへ、10月には
冬将軍の到来。「二、三か月で片付
ける」というヒットラーの豪語の通
り、夏の装備のまま冬の用意をして
いなかったドイツ軍の進撃は鈍り、
ソ連軍の反撃を呼ぶことになった。

…… スターリンの打算 ……

出来るだけ戦争に巻き込まれない
ように、その圏外に立つ。交戦国が
血みどろの抗争に疲れ果てた時に、
強大な武力を背景にして乗り出し、
戦局收拾に指導的発言権を確保する
ことにあった。

昭和14年8月、独ソ不可侵条約を結
んだ時も、英仏軍事使節団がモスク
ワで英仏ソ同盟を働きかけていた。
スターリンがドイツを選んだのは、
英仏と結べば即刻参戦しなければなら
ないが、ドイツと話をつけておけ
ば、しばらくは戦争の成り行きを静
観出来ると考えたからだ。

日ソ中立条約についても、同じ打
算が動機になっていた。スターリン
は赤軍スパイ・ゾルゲの報告で、ヒ
ットラーが松岡にシンガポール攻撃
を迫ったことを知っていた。日本に
中立条約を与え、日本が南進して米
英と衝突してくれれば、これほど好
都合なことはないと考えたのだ。

● 12日夕、スターリンとの交渉で急転直下妥結

日ソ中立条約

三か条の簡単なもので、①日ソ両国の相互不可侵②日ソいずれか一方が第三国と戦争になった場合は、他方は中立を守る③有効期間は五年で、期間満了一年前に廃棄通告しなければ、さらに五年間自動的に延長。(昭和16年4月13日調印)

▽北樺太の利権問題は、日本が「数か月以内に利権解消に努力する」との英文書簡提出で解決

▽ソ連は条約期限が8か月残っていたのに対日参戦

▽背信の点では日本も同罪 独ソ戦が勃発すると

「関特演」(関東軍特別大演習)と称して

80万の大動員 北進を狙っていた

▽利権解消に 具体的に動き出すのは

ソ連に和平仲介を求めた戦争末期のこと

● 松岡は得意満面、「大構想は成った」の思い

▽スタインハート駐ソ米大使と

行きと帰りに3回極秘会談 布石を打っていた

▽スタインハートに ルーズベルト宛ての

手紙を託し 大統領との直接会談を希望

● チャーチルも、モスクワの松岡に秘密メッセージ

▽重光葵駐英大使がベルリンの大使・公使会議の時 持参する予定だったが、交戦中で無理

チャーチルは「リスボンまで特別機を出すから スイスで松岡と落ち合ったらどうか」

▽松岡は「スイスで道草食っている暇はない」

▽結局 モロトフ招待の芸術座観劇会の時

クリップス駐ソ英大使から秘かに手渡された

▽内容は イギリスの実力を指摘した上で、

「英米の鉄鋼生産量は8750万トあり、もしドイツが敗れた場合、700万トの日本一国だけで戦争遂行が可能だろうか」

▽「このことは、英米の二大海軍国と良好な関係を保つことによって、悲劇を避け得ることを示していないだろうか」と 日本の自重を促したもの

▽重光に云わせると「松岡外交は

ドイツの勝利を信じ、これに一切を賭けたもの」

ゾルゲ(Richard Sorge)

1895~1944 ドイツの共産主義者。赤軍スパイとして昭和8年、ドイツの新聞特派員の肩書きで来日。独大使館情報顧問となり情報収集に努める。16年警視庁に検挙され、19年死刑

調印式の松岡・スターリン



スターリンが「君、約束したことは守れ」と云えば、松岡は「日本には昔からウソを云ったら首をやるという諺がある」と応酬、二人ともすっかり酔って上機嫌。

国際列車

松岡の後ろはスターリン(右)とモロトフ の出発は午後五時だったが、スターリンは「諸君、国際列車は出発を一時間延ばしました。存分に飲んで下さい」。

松岡が駅で見送りの外交団と挨拶していると、すっかり酔ったスターリンがモロトフと肩を組ながら、線路を横切ってやってきた。古今未曾有のことだった。二人はパッと抱き合い、スターリンが「これでヨーロッパで恐ろしいことはなくなった」と云えば、松岡は「いや、ヨーロッパどころか世界で怖いものはないじゃないか」。最後は肩を叩き合い、「俺はアジア人だ、お前もアジア人だ、アジア人だ、アジア人だ」

▽「わが道を行く」松岡には通じなかった

- 松岡外交の特徴は、常に強く出ようとしたこと
 - ▽随員の永井八津次陸軍大佐は「これからソ連と交渉するのに、関東軍に満州で事件を起こさせろ」と云われて びっくりしたと云う
 - ▽国際問題をパワー・ゲームとして処理しようとしたところに大きな間違い

- 4月20日、大連に着くと近衛首相から電話

▽「アメリカから重大な提案が来たから
至急帰国してほしい」

▽松岡は晴れ晴れとした笑顔で

「もう来たか、さあ次はアメリカへ飛ぶぞ」

▽スタインハート工作が実った、と思ったのだ

▽日ソ中立条約調印は

松岡得意の絶頂と同時に失意の始まり

- 4月17日午後から18日朝にかけて、野村吉三郎駐米大使から重要な電報が続々と入電した

▽7項目の「日米諒解案」全文に続いて

「これで交渉を進めたい」と政府訓令を求めた

▽一言で云えば 満州国も認めよう、金も貸そう、
三国同盟もそのままでもいい

棚からボタ餅のようないい話

- 日本政府は諒解案を「米国提案」と誤解してしまった

野村大使の電文

「本十六日国務長官と私邸に於て会談。長官より別電第二三四号（両国諒解案と仮称す。本諒解案については予てより内面工作を行い米国政府側の賛意を「サウンド」し居りたる処、ハル長官に於ても大体之れに異義なきを旨確かめ得たるに依り本使に於ても内密に関与し種々折衝せしめたる結果本案を約したるものなり）に依り交渉を進めて宜しく政府の訓令を得られたき旨申し出あり。長官は貴使との間の話が進みたる後東京より否認することあらば米政府の立場は困難となるをもって斯くしたしと申せり」

岡村二一さんの話

満州里へ着く前の晩、松岡が「お前、ちょっと手帳に6月26日のところへ二重丸をつけておけ」。「何ですか」と聞くと、「その日に俺は重慶に行く」。「そんな、とても無理だ」と云うと、松岡は「南京に飛んで蒋介石の飛行機に迎えにこさせる。蒋介石に、日本はもうソ連と仲良くしちゃったんだから、今度は君とアメリカと仲良くする」

チャイナ・クリッパーという重慶とワシントンをつ結ぶ航空路を利用してワシントンへ飛び、ルーズベルトと三者会談をやる。「お前も連れて行ってやる」と云う。

松岡は「支那事変の解決条件は、満州国さえ認めさせればいいんだ。ただ万里長城と満州国の間を中立状態にする。そうしないと、また喧嘩が始まるし、南方からも全部兵を引く。ルーズベルトへのお土産は大きくしないといけないから、北部仏印に進駐している部隊を増員して、南部仏印へ出る姿勢を見せる。それをきれいに引き揚げさせれば、ルーズベルトの顔も立つ」

野村 吉三郎(のむら・きちさぶろう)

明治10(1877)～昭和39(1964)和歌山県生まれ。海軍大将。第三艦隊司令長官の時、上海爆弾事件で片目を失う。学習院長を経て昭和14年阿部内閣外相。15年11月駐米大使となり、開戦直前まで日米交渉を重ねた。29年に参議院議員

ハル(Gordell Hull)

1871～1955 テキサスの判事出身。ルーズベルト政権の国務長官となり日米交渉に当たる。国際連合設立に貢献

▽野村は「米国提案」とは云っていないが
とりようによっては そうとれる表現
▽しかも並行して入ってきた陸軍武官電が
「諒解案はルーズベルトの同意を得ている」
「日本側の意思表示あり次第、その大綱は一、
二日中に決定すること確実なり」
▽日本側に 米国政府提案と錯覚させる内容だった

- 大橋忠一外務次官が閣議中の近衛首相を呼び出し、
第一報を入れると大変な喜びよう
▽18日夜の政府大本営連絡会議で
近衛は自ら 諒解案を「米国提案」と説明
▽東条英機陸相はじめ陸海軍首脳部も
「飛び付いた」といった はしゃぎぶり
- 日米交渉最大の問題点は、アメリカにとっては日独
伊三国同盟、日本にとっては支那事変の解決
▽日本の参戦義務について
条約にはない「積極的に」「おいてのみ」の
字句を挿入することで 日本は同盟はそのまま
にするが 実質的には同盟骨抜き意思表示
▽支那事変について
和平条件を米国大統領が容認し、日本政府が保
障した時は、大統領は蒋介石政権に和平勧告
和平条件には 満州国承認まで
▽ハワイ・ホノルルの首脳会談も提唱
- 「すぐ原則的賛成と返電」が大勢
▽「うま過ぎる話だ」の声もあったが、参謀次長も
「少し三国同盟にヒビが入っても止むを得ない」
▽大橋次官が「松岡外相帰国まで回訓は待つべきだ」
と反対 松岡の帰国を急がせることに

- 松岡は4月22日午後、立川飛行場に帰着
▽マスコミは「わが外交史上、画期的な成果」
朝日新聞も「国際連盟脱退の日、古い世界秩序
に爆弾を投じて凜凜しく帰ってきた松岡は、き
ょうは新しい世界秩序の手を握り交わして颯爽
と帰ってきたのだ」
▽近衛は わざわざ飛行場まで出迎えに

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。昭和15年近衛内閣陸相となり、16年10月首相。太平洋戦争突入後は憲兵政治により軍部独裁体制を敷いた。戦局悪化で参謀総長を兼務したが、19年7月総辞職。戦後ピストル自決を図り未遂。A級戦犯として刑死

日米諒解案

- ①日米両国の抱懐する国際観念および
国家観念(略)
- ②欧州戦争に対する両国の態度
日本国政府は、枢軸同盟は防禦的に
して、現に欧州戦争に参入しおらざる
国家に、軍事的連衡関係の拡大するこ
とを防止するに在るものなることを闡
明す。

日本国政府は、その現在の条約上の
義務を免れんとするがごとき意思を有
せず、もつとも枢軸同盟にもとづく軍
事上の義務は、該同盟締結国ドイツが
現に欧州戦争に参入しおらざる国によ
り積極的に攻撃攻撃せられたる場合に
おいてのみ、発動するものなることを
声明す。

米国政府は、その欧州戦争に対する
態度は、現在および将来において、一
方の国を援助して、他方を攻撃せんと
するがごとき攻撃的同盟により支配せ
られざるべきことを闡明す。…自国の
福祉と安全とを防衛するの考慮により
てのみ決せられるべきものなることを
声明す。

- ③日華事変に対する両国政府の関係
米国大統領は、左記条件を容認し、
かつ日本政府がこれを保障したるとき
は、米国大統領はこれにより蒋政権に
対して和平の勧告をなすべし。

イ、中国の独立 ロ、日華間に成立
すべき協定にもとづく日本国軍隊の中

近衛の言葉

「松岡君は感情の強い人だから、諒解案に政府、大本營が一致したということを初めに言い出す人物によっては、その時の気分でどう出るかわからない。私が出向いて帰りの自動車の中で話せば、案外スラスラ行くかも知れない」

▽ところが、近衛は感情を害して別の車に乗り説明を大橋次官に任せてしまった

▽近衛、松岡が離反していく別れ道

富田健治内閣書記官長の言葉

「近衛が松岡外相と同じ車に乗らなかった瞬間こそ、日本の歴史的運命の瞬間であった」（「敗戦日本の内閣 近衛公の思い出」から）

●スタインハートの筋でないと知って激怒した松岡

▽「このわしをさしおいて、外務大臣の職務権限をどう考えているんだ。留守中の自分を出し抜いた策謀だ」と息巻いた

▽酔って連絡会議に出てきたのは午後9時半

「ヒットラーさん、チアーノさん(イタリア相)」と訪欧の自慢話

▽たまりかねた近衛が 諒解案を持ち出すと

「アメリカにだまされるな！」

「この米国案に軽率にOKを出すことには不賛成だ。第一に、このような閣取引をすることは友邦ドイツの信頼にもとる。第二に、米国案は悪意七分、善意三分だ。この問題は重要であるから、二週間か一、二か月ほど考えさせてもらいたい」 旅の疲れを理由に帰ってしまった

▽病氣と称して 閣議にも出てこない

▽外交のかんじんな場面で

首相と外相に意思の疎通がなかった

外交に必要な「すぐ応ずる」タイミングを逃す松岡の人間的な欠陥がモロに

●諒解案の問題点を見抜いていた松岡

▽松岡が大橋に「英文の原案を見せろ」と云うと

「そんなものはない」

国領土よりの撤退 八、中国領土の非併合 二、非賠償 ホ、門戸開放方針の復活 へ、蔣政権と汪政権との合流ト、中国領土への日本の大量的または集団的移民の自制 チ、満州国の承認

蔣政権において米国大統領の勧告に応じたるときは、日本国政府は、新たに統一樹立せらるべき中国政府または該政府を構成すべき分子をして、ただちに和平交渉を開始せしめるものとす。

日本国政府は、前記条件の範囲内において、かつ善隣友好、共同防衛および経済提携の原則にもとづき、具体的和平条件を直接中国側に提示すべし。

④太平洋における海軍兵力および航空兵力、ならびに海運関係(略)

⑤両国間の通商および金融提携(略)

⑥南西太平洋方面における両国経済活動

日本の南西太平洋方面における発展は、武力に訴うることなく、平和的手段によるものなることの保障せられたるにかんがみ、日本の欲する同方面における資材、例えば石油、ゴム、錫、ニッケルなどの物資の生産および獲得に関し、米国側の協力および支持を得るものとす。

⑦太平洋の政治的安定に関する両国の方針(略)

日米会談

イ、日米両国代表者間の会談は、ホノルルにおいて開催せらるべく、米国を代表してルーズベルト大統領、日本を代表して近衛首相により開催せらるべし。代表者数は各国五名以内とす。

ロ、本会談は、第三国「オブザーバー」を入れざるものとす。

ハ、本会談は、両国間に、今次諒解成立後、なるべくすみやかに開催せらるべきものとす(本年五月)。

ニ、(略)

▽もし米国提案なら まず英文があって
それを翻訳した日本文となるはずだ
「これはヨコ（英文）のものをタテ（日本文）
にしたものではない。日本人の作文だ」

●この日米交渉ほど、誤解に始まり誤解に終始した奇
怪な外交交渉はなかった

▽交渉のキッカケが 日米民間人による素人外交
双方に 策士が介在したことにあった
▽ニューヨーク州メリノールに
少数派カトリック教徒設立の海外伝道教会本部
▽15年11月25日 会長のウォルシュ司教と
事務総長のドラウト神父が来日した
▽東アジアの布教に熱心で
京都の教区長交代式出席が名目だったが…
▽聖職者として 日米関係を改善したいと
日本の政財界や 軍部などの要人と
話し合うことが目的だった
▽元ブラジル大使沢田節蔵の紹介で
松岡にも会ったが 松岡は相手にしなかった

●もう一通の紹介状が、日米政府間に思いもかけない
パイプをつなぐことに

▽産業組合中央金庫理事の井川忠雄に宛てた
クーン・レープ商会重役ストロズの紹介状
▽ストロズはフーバー元大統領の秘書を務め
戦後は原子力委員長をした大物財界人
▽井川は大正9年から昭和2年まで
大蔵省のニューヨーク駐在財務官
近衛とは一高同窓 近衛の政策ブレン
「昭和研究会」の中心メンバーだった
▽二人の神父は いち早く近衛との連絡路
▽ホワイト・ハウスにも
ウォーカーという有力な「伝手」を持っていた
▽ウォーカーはルーズベルト大統領三選の際
選挙参謀として カトリック信者票をまとめ
その功績で 郵政長官のポストを与えられた人
▽日米民間人と近衛、ルーズベルトの間に
なまじっか 連絡回路が成立したことが
日米交渉を紛糾させることに

富田 健治(とみた・けんじ)

明治30(1897)～昭和52(1977)兵庫県生
まれ。長野県知事を経て昭和15年、第二
次近衛内閣書記官長。27年に衆院議員

沢田 節蔵(さね・せうぞう)

明治17(1884)～昭和51(1976)鳥取県生
まれ。昭和9年ブラジル大使。20年鈴木
内閣顧問となり戦後は東京外語大学長

クーン・レープ商会

日露戦争は、外国で日本公債を募
集して戦費を調達しないことには、
戦えない戦争だった。政府から外債
募集を命じられた日銀副総裁高橋是
清がロンドンで苦闘している時、助
けてくれたのがニューヨークの有力
なユダヤ系金融機関クーン・レープ
商会会長のヤコブ・シフだった。

全米ユダヤ人協会会長のシフが高
橋に全面協力を申し出たのは、帝政
ロシアのユダヤ人迫害をやめさせる
には、日本を助けてロシア帝国を打
倒する以外に道はないと思ったから
だった。

高橋も大いに徳として、外貨支払
いに当たる横浜正金銀行の取引をク
ーン・レープ商会とさせるなど、大
蔵省との間に密接な関係が出来た。

高橋 是清(たかはし・これきよ)

安政1(1854)～昭和11(1936)江戸生ま
れ。渡米して苦学。日銀副総裁の時に日
露戦争の外債募集に成功。大正2年山本
内閣蔵相。10年原敬首相暗殺後に首相、
政友会総裁。昭和2年の金融恐慌に蔵相
として手腕を発揮するなど六代の内閣
で蔵相を務めたが、二・二六事件で暗殺

▽神父たちは井川の紹介で 武藤章陸軍軍務局長
軍事課長の岩畔豪雄(いわらたごうすけ)大佐とも会見
▽帰国後 井川宛てに電報を打ってきた
「大統領訪問の結果、有望進捗中、
展開が期待される」

●近衛は「アメリカ通の井川にやらせて、成り行きを
見るか」とゴー・サインを出してしまった

▽外務大臣が重要交渉を知らないなんてことは
外国では考えられないこと 二重外交

▽井川は無給の外務省囑託として2月13日渡米
▽「人柱になる決意だった」

政界のよいポストにつきたいと野心満々

▽資格は私的なものだったのに

「臨時外相代理だ」「日本政府を代表している」

▽ドラウト、ウォーカーと第一次原案づくりに

●果たして、野村は駐米大使として適任だったのか？

▽提督としては有能で 人格者であっても

外交手腕となると 大きな疑問符

▽松岡は重光駐英大使を除いて在外外交官を一新

▽「ここは、あなたのような大物で、アメリカに顔
のきく人の出番だ」と 野村を口説いた

▽「陸軍から補佐役がほしい」の野村の要請に
陸軍から派遣されたのが 岩畔大佐

▽陸軍でも指折りのやり手で 野心家だった

▽武藤と折り合いが悪く 持て余した東条陸相が
野村の要請に 体よく放り出したのが真相

▽3月下旬 アメリカに着いた岩畔は
井川から一次案を見せられ

「これでは、とても陸軍が承知しない」と
日本の三国同盟離脱などを削った

▽一次案はアメリカのペースで作られ

二次案は岩畔のペース 日本にとって
かなり有利な文面を 並べたものだった

●アメリカはなぜ、諒解案を公式ルートに乗せたのか

▽神父工作自体 アメリカの謀略ではないのか？

神父には 日本の布教に有利な地位を築きたい
ウォーカーには カトリックの信頼を得たい

武藤 章(むとう・あきら)

明治25(1892)～昭和23(1948)熊本県生
まれ。陸軍中将。昭和14年から17年まで
陸軍軍務局長を務め、近衛内閣樹立、日
独伊三国同盟と日ソ中立条約締結、さ
らに大政翼賛会結成を推進した。近衛
第二師団長を経てフィリピンの第十四
方面軍参謀長で終戦。A級戦犯となり
刑死した

…… 野村大使とルーズベルトの仲 ……

昭和16年2月14日、野村がルーズベ
ルトに信任状を奉呈すると、ルーズ
ベルトは「自分は日本の友であり、
アドミラル野村はアメリカの友だ」
と笑顔で迎えた。

大正5年1月、野村中佐は駐米大使
館付武官としてワシントンに赴任し
た。野村は明るく豪快、けれん味の
ない人柄だったから、海軍次官をし
ていたルーズベルトと意気投合、メ
トロポリタン・クラブで食事をした
り、ルーズベルトの私邸を訪問し
たりして友情を深めた。

昭和8年、ルーズベルトが大統領選
挙に当選した時も、野村の祝いの手
紙に、「今度暇がとれたら、ぜひエ
リノア(夫人)を連れて日本を訪問し
たい」と返事を寄越したほど親しい
仲だった。

岩畔の言葉

日米諒解案について「あれは、ド
ラウト、井川、それに私の三人のデ
ッチ上げだ」

▽ハルはウォーカーから詳細を聞いていたが
 二次案が一次案より 多くの点で
 後退したことに 不満だったと云う
 ▽それでいて 日米民間人の私案を
 無下に斥けなかったのは ドイツ打倒が第一
 日本を三国同盟から 離脱させられれば
 ▽ハルは4月16日 野村を招いて
 「これまでの話し合いは、いわば民間の会談だ
 ったが、今後は大使と国務長官の非公式会談に
 移し、この諒解案を基礎として交渉を進めたい。
 ついては日本政府の意向を得てほしい」
 ▽諒解案は 双方の言い分をそれぞれ盛り
 互いに不満な部分は 今後の交渉の過程で
 修正していこうという 叩き台だった

●ハルは交渉に入る前提として四原則を提示していた

ハルの四原則

- ①領土保全と主権尊重②内政不干涉
 ③機会均等④太平洋の現状維持

▽厳密に適用されれば
 満州事変から 支那事変に至る
 日本の歩みは 真っ向から否定される
 ▽最初に「その覚悟があるか、そうでなければ
 交渉の可能性はない」と クギを刺していた
 ▽ハルは 野村の英語力について「マージナル」
 「問題点を理解したか、不安だった」
 ▽ハルの方も ひどいテキサスなまり
 ▽互いに 相手の発言を理解するのに苦勞

●野村は、四原則を東京には全く打電しなかった

▽それほど重要ではないと思ったのか
 こんなことを伝えたら 交渉にならない
 ここは とにかく交渉に入ることだ
 そう思って わざと隠したのか
 ▽野村が四原則を伝えたのは 5月8日の電報
 「米国側が執拗に四原則を主張したので、相互
 に原則論に深入りしないことを提案して、これ
 を抑えた」
 ▽ハルの真意を正確に伝えたとは とても云えない

ハル回想録から

「余は最初成功の見込みは二十分の一、又は五十分の一、或は百分の一もないものと判断した。

日本の過去及び現在の経歴、隠れもない野心、我々が混乱に陥っている欧州に大部分の注意を払っている間、同国の前に横たわる勢力拡大の好機、及び国際関係に関する我々の見透しの間の根本的な相違は、みなかような実現性を肯定するものではなかった」

アメリカの対日政策

昭和15年後半のアメリカの政策決定者には、ハル国務長官、スティムソン陸軍長官、イキス内務長官、ホーンベック国務省顧問など、対日強硬論者が座っていたが、ルーズベルトにとって最大の希望は、独伊枢軸の勝利を阻止することだった。

三国同盟が締結されると、グルー駐日大使は「明らかにドイツによる英国撃破に賭ける、日本の途方もないギャンブルだ」と報告したが、この時点でアメリカの第一目標は、ドイツ打倒だった。

その背景には①ドイツが日本よりも、大きな軍事的潜在力を持っている②ドイツはヨーロッパ西海岸全体を制している③英国はすでにドイツと戦っていて、援助が出来る、の三点があった。

従ってこの時点の対日政策は、グルーによると①出来れば、外交により米国の国益になるように日本を阻止する②出来れば、日本に対する戦争に巻き込まれることなしに、この目的を達することだった、と云う。

▽日米交渉には 日本側に時間稼ぎの謀略説

▽国務省顧問ホーンベックも

「諒解案をエサに日本を適当にあやしておけ」

▽しかし ハルが最初に四原則を出している以上

ハルの騙しではなく 伝えなかった野村の騙し

諒解案が いかにも米国提案だと

思わせるように画策した 岩畔らの騙し

●陸軍が諒解案に乗ったのは「ダメでもともと」

▽武藤は「岩畔の作文」を見抜いていた

▽陸軍首脳会議で 武藤は「日独枢軸分裂の謀略ではないか」と指摘した

▽結局 陸軍が「原則的に賛成」したのは

「アメリカの謀略でも構わない。日中和平の橋渡しをしてくれれば、日本は万万歳。アメリカがやらなかったら、いつでもご破算にすればよい」

●松岡が連絡会議に出てきたのは5月3日

▽三国同盟堅持と対米強硬姿勢を強調

「松岡三原則」を承認させた

①アメリカが中国から手を引くこと

②三国同盟に抵触しないこと

③ドイツに対する信義を破らぬこと

▽さしあたり 野村大使発案の形で

日米中立条約を提案させ 反応を見ること

ハルに 口上書を出すことが決まった

▽アメリカは「マジック」と呼ばれた暗号解読で

松岡の腹の内まで 見透かしていた

▽松岡外交は 初めから勝負にならなかった

●松岡修正案は12日に提示された

▽松岡は 諒解案の妥協点を全て否定した

▽ハルは「この文書からは、ほとんど希望の光が射してこなかった」と云っている

▽三国同盟の日本の参戦義務から

「積極的に攻撃された時のみ発動」の

苦心の字句が 消えた

▽支那事変の和平条件 南方への武力中止から

諒解案最大の目玉である

ハワイの日米首脳会談まで削ってしまった

日本側に根強い米国謀略説

大橋外務次官は「太平洋戦争由来記」(聊27年)に「アメリカの謀略家が太平洋の裏口から米国を戦争に引きずり込むため、当初からいささかの誠意も持たず、会議を遷延せしめ、日本に石油がなくなった頃を見計らって、誰が考えても受諾不可能の条件を突き付け、日本に戦争の口火を切らした手口は実に巧妙であった」。

参謀本部作戦部長だった田中信一少将も、「大戦突入の真相」(聊30年)で「日米諒解案がハルによって取り上げられた。それが単なる謀略に過ぎなかったという観測も、陸海軍の注文による時間稼ぎだったという噂も、いずれも無根ではなかったと思われるふしがある」と書いている。

国務省顧問ホーンベックは「諒解案は絶対に受け入れられない。しかし日本は、会談の不成功が明白に出るまでは行動に出ないから、それを材料にして日本を会談に巻き込め」との意見書を出していた。

…… ハルと野村のやりとり ……

5月7日、野村の中立条約提案に、ハルは「それは別問題」と取り合わなかった。口上書は「日本は三国条約に基づき、同盟国独伊の地位を少しでも毀損するようなことは絶対にしない決心である」と、岩畔が「ぶち壊した」と呻くような内容だった。

野村が「内容に不適當なことが書いてあるが、お渡ししますか」と打診すると、ハルは「大使にその権限がおりなら、そっちにとっておいてもらって結構だ」。暗号解読で、とっくに内容を知っていたのだ。

ハルは「これらは、日本政府が我々と平和会議を行いながら、一方で

▽松岡は「トップ会談が不調に終わった時の
リスクを考えると 非常危険だ」
▽やがて日本の方から 首脳会談を提唱
拙劣極まりない 愚かなやり方だった
▽ハルは ルーズベルトと話し合い
「対日譲歩せず」の方針と共に
「たとえ ほんのかすかでも
日本を 枢軸同盟から切り離す可能性は
求めなければならない」とした

●アメリカの正式回答は6月21日

▽翌日の独ソ開戦を 読み切ったことだった
▽「新事態になっても、アメリカの態度は変わらない」ことを示すため あえて前日を選んだ
▽アメリカがドイツに挑発され 参戦した場合は
日本が参戦しないことを確認し
松岡が削除した 支那事変和平条件を復活させ
南方にも 武力行使を禁止した
▽しかも ハルの「松岡忌避」の口上書が怒らせた
▽しかし近衛は 日米交渉を進めるには
松岡を替える以外にない
7月16日 総辞職して松岡を罷免した

●松岡外交の挫折は、第一に自分に対する過信

▽他人の言葉に耳を傾けなかったし 狭量だった
天下国家の大事より 面子にこだわった
▽第二に ドイツとアメリカの評価を誤った
独ソ戦が始まって ドイツ必勝を信じ
アメリカの国民性を 強く出れば引くと判断

●もし、日米諒解案をもとに交渉を進めていたら？

▽主張に大きな隔たり 容易でないことは確か
▽ただ 国際情勢は激動していた
▽ドイツの重なる不信に 日本は
三国同盟から 離脱するチャンスだった
▽しかし ドイツ勝利を信じてしまった
▽アメリカにしても 最初は
ドイツ軍は破竹の勢いだったから
あるいは 対日妥協を図ったかも知れない
▽日米戦回避のチャンスを逃したのは 残念だった

は侵略計画を進めていることを示していた。これらの傍受電報を見ると、自分の言い分と反対の証言を行なう証人を見ているような気がした」と回想している。

独ソ開戦情報

アメリカは米英の情報網から「独ソ戦は22日確実」の情報を得ていた。しかし開戦時間まではわからない。ホーンベックは「ベルリン時間で攻撃するはずだ。22日午前零時以降だから、ワシントンとベルリンの時差は6時間、我々は21日午後6時前に渡せばよい」。こう主張し、米国案提示は21日午後零時半に行なわれた。

日本はどうだったのか。大島駐独大使は6月3日、ヒットラーに「独ソ戦必死」を告げられ、「独ソ戦は短時日のうちに決行せらる」と急電した。しかし、松岡は信じなかった。天皇に「協定成立六分、開戦四分」と上奏、参謀本部も「ドイツがイギリス、ソ連と二正面作戦の愚を繰り返すはずがない」と思っていた。

情報を突き合わせて総合判断をする。その能力にも組織にも欠けていたのが、日本の最大の欠陥だった。

ハルの口上書

「日本の指導者の中には、国家社会主義のドイツ及びその征服政府の支持を要望する進路に対し、抜き差しならざる誓約を与え居る者もある。かかる指導者たちが公の地位においてかかる態度を維持し、公然と日本の世論を上述の方向に動かさんと努める限り、実質的成果を収めるための基礎を提供すべしと期待するは、幻滅を感じさせることとならざるに非ずや」